夜間学校

今夜7じから
西成市民館3階
(西成署ウラ、炊き出し公園前)
毎週金曜日

みんなでつくろう
みんなの会館
三人よれば何とかの知恵

釜ヶ崎梅雨の医療週間
講演集会へ合流します。
(夕方6:30から)

「釜ヶ崎労働者の生命と健康の為のイロハ」

「福祉切りすてはどう進んでゆくか」

「釜ヶ崎労働者差別と生活の実情」

連絡先 釜ヶ崎夜間学校
西成区萩之茶屋 2-5-23
解放会館2階 釜日雇・失業者共闘気付

釜ヶ崎梅雨の医療週間が今週月曜日から始まっている。そして、連日十五人から三十人が、医療センターで診察・治療を受け、お更相談口へ行っている。

仲間達はすでに身をもって知っているように、四月から七月にかけての長期アブレが五年来続いている。そして、越冬時期を上回る仲間が、今年もまた釜の中や周辺に、ゴロ寝したり、天王寺公園にテントキャンプしたりしている。

これは財政の破綻を、法人、企業を守りながら、下へシワ寄せすることによって切り捨てようとしている中曽根の"臨調、行革"のもと、公共事業が切りつめられているからだ。もちろん福祉も切り捨てられている。

そのことが、福祉切りすてはどう進んでゆくか の話の中で充分明らかにされることだろう。

また、現実の生活の中で、日々自分の健康をどう守っていくかが、釜ヶ崎労働者の生命と健康の為のイロハ」の中で話されるだろう。

青カンをよぎなくされている釜の仲間達を世間の人々はどのような目でみているだろうか。そして、どのように対応しているか。「釜ヶ崎労働者差別と生活の実情」の中で話される。

アオカン生活の中から

川野さんの自殺記事はかなりの反響があったようです。他人事ではすまされない重い、せつない気持ちが誰れの胸にもあったはずです。「同じ死ぬんだったら、飯場のオヤヂを殺してから死ぬ」という声が出る一方では、川野さんの「遺書」が心配だ。世の中がいやになった」ー「体が弱く老後

「やっぱり川野さんは、飯場で仕事をことわられたんやろな」

「急速に環境がかわったんとちがうか。徐々にやったらこういうことはせんもんや」

「働く気もあって、飯場まで行けるそこそこの金があった人が仕事をことわられると、よけいにショックやろな」

「ワシはこの川野さんと同じ昭和六年生まれや。二ケ月ほどずっとアオカンやけど、気持ちはようわかるわ」

「半分以上の人は死にたいと思ってるのとちがうか」

「仕事はないし、体もきついし」

「市民社会やったら、五二、三というのは、もうふしんぼうしたら自由になるかなりの金も手に入る年代や」

「退職まぎわやな」

「アオカンを長うやってると、働らく気がなくなる。これまではなんぼやっても一週間くらいやったけど、今はやるだけやったれ、という感じや。今は食べるだけが問題や。友達ができてろいろ助けてもらうと、一人で働らきにいく気になれんのや。しばらく仲間の顔を見んかったら心配になってな」

「炊き出しには絶対に行かん、とか、飯場には絶対に行かんとかいう最低限の「意地」みたいなのをもってる人もおるな」

「越冬のパトロールしてても絶対毛布をうけとらん人もいる」

「小さい時の環境の問題や」

「しかし、どんな人間でもハウをへらしたら同じとちがうか」

「それにしても、立小便したり道に寝ころんだりで釜の土方はどうしようもないな」

「サンでも釜へきて長うアブレたりしたらそうなる」

「シノギにやらんでも知らんふりいう人も多い」

「電車の中で女の人がからまれても無視してるのと同じやな」

「釜の人はたいていアオカン経験ある。自分は早うきりあげたいうて、炊き出しの時なんかいろいろ言う人がおる」

「ノド元すぎればアツさ忘れるいうわけか」

「アブレとかアオカンというのは釜の労働者の中をグルグルまわってるもので、どっちも労働者の責任ではない」

「悪いことしている奴は誰かもアオカンなんかしてないで」